

香港映画界の危機的な状況を感じたのは、昨年2024年12月4日の日本経済新聞の現地からのレポートでした。「香港映画瀬戸際の輝き 社会派作品で記録的ヒット」と題されたものです。それによれば、2022年の香港映画の公開本数は27本となり、1980年代から1990年代にかけての黄金期に比べ二割弱にまで落ち込んでいると言います。これには様々な要因が絡んでいるようで、中でも大きな要因の一つは、2020年に施行された香港国家安全維持法であり、これによって「国家安全に不利益」な作品の上映が禁じられました。また、2000年代から「人材やノウハウの中国本土への流出が進んだ」とことと「日本や韓国、東南アジアでの映画産業が成長し、香港映画は市場を失い資金難に陥った」とし、「香港映画のほとんどは政府の映画支援制度を使って、ようやく制作にこぎつけている」という現場の声が上がっていると状況です。政府支援を受けて制作される作品が「国家安全に不利益」な作品でないことを考えれば、著しい表現の自由の規制であり、恐るべき前時代的な検閲制度が未だに蔓延していると言わざるを得ません。こうした状況の中で、現地からの報告は、「香港に留まった映画人が苦境の中で政治・経済両面での閉塞感を映した社会派の作品作りに挑み、住民の心を捉えている」と言います。そして、それらの作品としてアンセルム・チャン（陳茂賢 1982~）『ラスト・ダンス』（2024 原題『破・地獄』）、ジャック・ン（吳煒倫 1976~）『毒舌弁護士』（2023 原題『毒舌大状』）、ラオ・コックルイ（劉国端 1990~）『白日青春生きてこそ』（2022 原題『白日青春』）、ラム・サム（林森 1985~）『星くずの片隅で』（2022 原題『窄路微塵』）、ホー・チェックティン（何爵天 1987~）『正義回廊』（2022）といった作品が挙げられています。

『エレクション』（2005 原題『黒社会』）などを発表した香港映画界の名匠ジョニー・トー（杜琪峯 1955~）は、「私と香港は人権と自由という魂を失った。人生で最悪の時期」と悲嘆を露わにし、『十年』（2015）、『時代革命』（2021）を撮り香港の中国化に警告を与え続ける闘士的存在のクワイ・チョウ（周冠威 1979~）は、「香港映画は恐怖に囚われている」と悲観的な意見を口にしています。そして、報告は「国安法（香港国家安全維持法）で民主化への道は断たれた。中国の景気停滞により経済面でも展望が開けない。単純なアクション映画などでは発散できない香港社会の深い閉塞感をとらえた作品がヒットしている」とあります。この言いには多少の抵抗を感じるころであります。香港の映画作家たちにとって現在が苦衷の最中にあるということは否定できないことです。

ふるまいよしが2024年10月に「artscape」で「香港映画が紡ぐ『香港人らしさ』新しい香港映画の波がやってくる」と題した一文を記されていますが、実に明快な香港映画界の分析が行われています。そこから借りてくることにしますと、「香港映画界は2003年以降に中国から大量の資金が流れ込み、合作映画の触れ込みで中国市場に向けた作品づくりのブームが起きた。当時の中国市場にとって、香港映画界は華やかで都会的、またスターらしいスター俳優と洗練されたネタやアクションなどで眩しい存在だった。（中略）それは香港映画界にとってもチャンスだった。流れ込む大量の資金と巨大な中国市場進出の波に乗り、中国市場ウケする作品づくりが始まり、映画界は浮き足」だったが、問題点も出てきます。「中国市場を視野に入れた場合、絶対に撮ることができないテーマがあること。例えば政治の話題、あるいは政府高官や権威ある警官などを『悪く』描くことは中国では許されていない。次にスポンサーはとにかく著名映画監督や人気俳優ばかりを買い漁った。（中略）作品に話題性があれば簡単に資金回収どころか利益を上げることが可能だった」が、「次世代の育成にはまったく関心がなかった」という現象が起こります。そして、2019年以降突然の転換期を迎えます。「この年（2019年）後半に香港で吹き荒れた民主化運動、裏を返せばアンチ中国政府運動により、中国国内では『香港』に関わるさまざまなものがタブーしされる」ことになり、「それまでもはやされたきた香港映画は放り出されてしまった。映画界を潤していた大量の資金が潮を引くように引いてしまうと同時に、低予算映画のチャンスが到来」と指摘します。「（これまで活躍の場が与えられなかった）若手監督や脚本家、そして俳優たちに日の目が当たり出したのだ。また、彼らは2019年のデモ以降

の社会における共通テーマ『香港人意識』『香港人らしさ』をそのまま意識する世代でもあった。それが観客のニーズと結びついた」のです。そういえば、いつの頃からか、それまで「Hong Kong People」といった表現が「Hong Konger」に変わり一般化している現状です。

さて、現在公開中の香港映画『トワイライト・ウォリアーズ 決戦! 九龍城砦』(2024) (原題『九龍城寨之圍城』) は、2024年5月に香港で公開されるや、2ヶ月で興行成績が1億香港ドル(約18億円)を突破し、英版wikiでの興行収入は1億1150万米ドル(160億円以上)と大ヒットを記録しています。タイトルに出てくる「九龍城砦」というのは、「九龍城」とも呼ばれた香港九龍地区にあった言わば治外法権的な不法入境者や犯罪者が暮らしていた地区で26,000㎡と言えばサッカーコート4面程度の広さに約33,000人が住んでいたという世界一の人口密度の高いところ。ここで繰り広げられるアクション巨編は見応えがあり、理屈なしに楽しめる久々に見ることのできる香港映画です。筆者は俳優事情にはさほど詳しくはないものの、登場してくる功夫(カンフー)の使い手たちは、香港の新旧の銀幕スターたちであることは理解できます。1950年代生まれのサム・ハン(洪金寶)から、1960年代生まれのリッチー・レン(任賢齊)、ケリー・ウォン(黃德斌)、アーロン・クオック(郭富城) 1970年代生まれのルイス・クー(古天樂)、フィリップ・ン(伍允龍)、レイモンド・ラム(林峯)そして1980年代生まれのジャーマン・チョン(張文傑)、テレンス・ラウ(劉俊謙) 1990年代生まれからはトニー・ウー(胡子彤)と多彩な銀幕スターたちが登場します。監督は1972年生まれのソイ・チェン(鄭保瑞)です。ある意味、2022年に公開されたインド映画のS・S・ラージャマウリ監督『RRR』に通じるところがあるとも言えます。

功夫映画といえば、キン・フー(胡金銓 1931~1997)からの系譜ということになり、継承者たるツイ・ハーク(徐克 1950~)につながりますが、本作のソイ・チェン(鄭保瑞)は香港的文化財的荒事の新たな継承者としての地位を確立したものと考えられます。香港人たちがこうした作品を待ち望んでいたことは興行収入の高さからも証明できるでしょう。こうした香港映画と言えは想起してしまう功夫映画、それに低予算ながらもメッセージ性の高い社会派作品が二枚看板的に供給される体制が確立できれば、香港映画界の将来に光が差し込むことになるのではないかと考えます。また、それ以上に重要なのは、『時代革命』(2021)のキウイ・チョウ(周冠威)や『少年たちの時代革命』のレックス・レン(任侠)ラム・サム(林森)を始めとした民主化活動を正面から取り上げ、「国家安全に不利益」な作品づくりを行うあらゆる映画作家たちが、香港での制作が困難な状況であれば、台湾なり第三国を新たな制作拠点として安定した映画づくりを続けられる環境にあって欲しいと切に願う次第でもあります。